

事件は現場で起きています



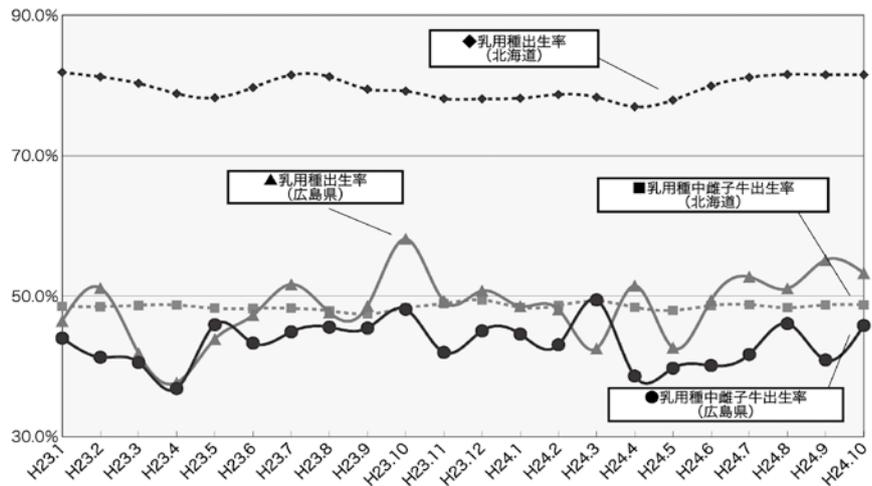
初産牛の搾乳「第一印象が大事」 人も牛も「アドレナリン」を 放出させない！

広酪事業推進課 係長 大島達夫

【広島の出産率と雌子牛は増加傾向】

平成 23 年次と平成 24 年次の 10 月までの乳用牛の出産率と、そのうち雌の割合をグラフにしました。北海道では 24 年度下期より、乳用種の出産比率が再び増加傾向にあり、雄・雌の比率に大きな変動はありません。

比率は遠く及びませんが、我が広島県においても乳用種の出産割合は増加の方向にあり、喜ばしいことです。しかし、現在、回復基調にあるとはいえ、北海道には遠く及びず、そのうちの雌子牛の割合は北海道の水準を大きく下回っています。広島県においても、育成初産牛というのは非常に貴重な存在であり、飼養管理に細心の注意を払って頂きたいと思っています。



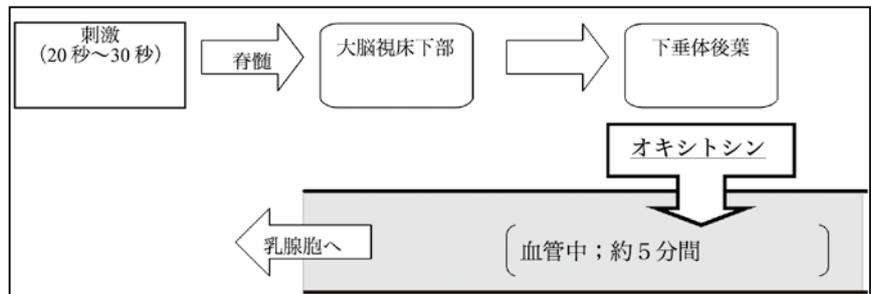
(注:公表された(独)家畜改良センターが牛個体識別全国データベースの情報をもとに、当該月一日現在の飼養頭数を翌月一日に集計した参考値を利用)

【初産牛は恐がり!!】

酪農家自身や私たちにとっては、普段から通い慣れた牛舎ですが、以前「悲牛院花子の生涯」を本誌で紹介しましたが、初産牛にとってみれば搾乳牛舎は恐るべき環境のところ。空気は良くないし、大きい牛に囲まれるし、立ち座りは不自由で、最後には人間が怖い機械(搾乳機)を持ってきて痛々しい思いをさせるのが現実です。

搾乳の基本ではありますが、牛にとって気持ちの良い搾乳のためには、適切な乳頭への刺激により『オキシトシン』というホルモンが血液中に分泌さ

せる必要があります。そして、通常、このホルモンが血液中に有効な濃度で存在しているのは約 5 分間であり、その間に搾り切ることがスムーズで乳器に負担をかけない搾乳として随分前から推奨がされています。



しかし、牛が驚いたり、緊張したり、痛い目にあったりすることで交感神経が刺激されると、『アドレナリン』というホルモンが放出されます。すると、乳腺胞に届くオキシトシンの量が減少し、いわゆる《おろしが悪い》《乳を抱いてしまった》搾乳となります。こ

のことは、経験もおありだと思いますが、最近搾乳中の生乳の流れ等が測定できる機械として利用が拡大している『ラクトレコーダー』等によって牛の個体や牧場ごとの泌乳状態の測定を行えば、グラフにもはっきりと現われてきます。

〈次月号に続く〉